

科学技術社会研究所第 36 回研究会 講演概要

日程 2013 年 4 月 5 日(木) および 4 月 6 日(金)
場所 KKR(箱根)宮ノ下ホテル

36-1 老人のための老人による老人の施設を作ろう (菅沼純一氏)

菅沼氏は、20 年以上前に書かれた伏見康治氏(当時 82 歳)による表題のエッセーを読み上げ(各自に配布) 老人が保護される受け身の生活ではなく老人が能動的に働く場所を作りたいとする文意を披露した。伏見氏は例えば、大学や研究所を定年退職後の老人たちの能力・判断力を無駄にすることなくある水準を保った議論の出来る場所、老人による「老人研究所」や「クラブ」を作るべきで、パソコンをはじめ現代のエレクトロニクス技術の様々な成果を、そのために活用できる、とも言っている。

参加者から、この内容はおおいに共感できるものであり、又、我々の科学技術社会研究所はこの趣旨に沿っているのではないかとの発言があった。

しかし、老人になってからの場所は老人になる前からの準備が必要である。

新しいことをしようとしても昔の組織から外れたら何も出来ないのではないか？

結局過去を引きずるだけだろう。

過去を引きずって悪いことはない。過去を否定することなど出来ない。

現役の時にネガティブに見ていたことが、「晴れて老人」となって出来ることもある。

等々、今後の展開が期待される活発な議論が交わされた。

(文責外山氏)

36-2 混沌のインド (岡田修身氏)

岡田氏が今年 2 月に訪れたデリー近郊の北インドの様子について、旅行者の目で見えた感想を述べた。近代的ビルが並び立つ都会の中で、オフィスに働く人々と周辺道路に並ぶ貧困を象徴するようなバラック小屋とそこに住む人々の織りなす風景。私(柴田)も昨年南インド(バンガロール)を訪れたので、場所によって何か違いがあったかと拝聴していたが、ほとんど同じ様子であったようだ。ということはたった 2 カ所でのことではあるが、様子が一致しているということは恐らくインド全体の様子を表しているものと解して良さそうである。今回の旅行のハイライトはタージマハールということで、演者はその美しさについての話をした。その他、カジュホラの寺院の彫刻の面白さ、ガンジス川の汚さとそこで沐浴する人々の様子、本場カレー料理のおいしさと辛さなどを、ご自身作の歌と共に紹介した。

(文責柴田氏)

36-3 「世界の動く仕組み - 2」主権を握るセクター (伊藤泰男氏)

伊藤氏により今年の第 33 回研究会での第一部の発表に引き続き、Chomsky などの著作を参考にした社会批判の考察が述べられた。それによれば、“民主主義”も社会を主導しているセクターに

よって変質させられる。現在は米国を代表例として多くの国の人々が“ダボス階級”による Corporatism 的支配すなわち金権貴族政治のもとにあると見られる。献金等による政治へのコントロール、広告費等を通してのメディアへの介入、娯楽や消費の勧誘やプロパガンダによる人心の誘導が蔓延している。我々老人は蝸壺から脱して社会をよく観察し、抗うことによって打開・改善の役に立つことを心がけるべきである。

この考察発表に関連して、中国社会の問題、日本では比較的政治家になりやすいこと、米国人の価値観などについて意見交換が行われた。(文責 白石氏)

36-4 日欧共同水星探査計画における宇宙塵測定プロジェクト(柴田裕実氏)

新たに入会された柴田氏が担当されている最新の研究課題である標記「水星近傍の宇宙塵測定プロジェクト」の概要について紹介した。

日欧共同水星探査計画(BepiColombo)は発足以来10年を経過したが、今後10年を要する大型プロジェクトである。はじめに「太陽系形成のシナリオ」の解明には、宇宙塵がその情報を持っているとの考えに基づいて調査が開始されたとの話があった。続いて「太陽系における宇宙塵の起源」および「宇宙塵の種類」について解説した。本論に入り、「宇宙塵測定プロジェクト」の紹介があった。特に、柴田氏をリーダーとして開発が進められている「宇宙塵の運動量測定用圧電素子型検出器」についてその詳細構造、およびVdG加速器による圧電素子型検出器の較正実験結果についての詳しい報告があった。今後、更なる開発研究の進展が期待される。

(文責白形氏)